

茶語

壹

又の法  
肥塚龍全を以て  
言ひ終る

明治二十九年七月

特別  
14  
1919  
218



A ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column on the left being the narrowest and the others being wider. The page is otherwise blank.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

A blank page with a faint circular stamp at the top center. The stamp is mostly illegible but appears to contain some text and a date. The page is otherwise blank.

○毒攻の溜池のむら旅亭に在りて  
 こゝを今夕は女の名正む舊雨轉りて  
 故く誰けと云ふ候もさうあるが昔  
 此名の名物にあつたと云ひ出  
 ところが溜池に奴が話の題と  
 出れば、何れ奴通か話つた話  
 ともいふ臨的備と云ふとも混  
 の主人の顔を見れば仕事あり  
 といふものもいふもいふもい  
 といふものもいふもいふもい

萬葉集  
 卷之六



○山岳雜誌二冊に小嶋鳥水が日本の山案内  
者 Guide の考考を論じ之をアルプス  
のガイドに比して大なる差を有ることを説  
きガイド改良論を掲げし其の終句に  
云々 翻へつて日本山岳の案内者は如何なる  
かといふこといつんちアルプスの如き  
おびそんていふ言を覚束ない山の名を  
けはらぬ辛うけんは直ぐ下山せし  
い出づし難い骨痛む者誰かぬぬ  
まゝしと云ふ海峽を捷くしと福也  
の案内者に出るべきと登山術が  
東洋製

——いさう登山者考の巻を論  
——いさう登山者考の巻を論

然んも卑見を以ていふは案内者の如きは  
抑もまゝの要は如何の登山者を作らざる  
るを登山者なく主流する人が行くやうな  
んは自ら是をするにあつても可なり  
るいふは、いさう登山者考の巻を論  
あつた高山植物の如きを、地質を云  
々し標高の如何をあげつらふそのが、  
リ湖き、崖、山、且つ、山、山、山、山、  
が、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、









ちを、七三のふきとつ飲れしとあやし、車輪の  
まゝにあらふもあうらむをげんじとて子僧の華文  
を後述のあつめかゝる地のみく水の流と車輪  
とをえまをて華文とて、故に車の異名を  
流と云くばるる、唐海防書抄卷五車と流  
のとをあつめの條に云く、此の流よりリウスイアカズ  
戸菜出リハストテリ、リウスイトハ何ゾ、車一  
名ツ流水ト云フ也、海水ノ流ル、ニ似タムカ故ニ流  
シ是ヲ云ク、上云とんえと、此の流のめく車を流  
あしとあか、而し流るる車輪とをえまをて華文  
とあつし、このまゝ云く

東橋屋製

○又唐獅ある牡丹を配する流る、此に里川真  
乾塔すと牡丹を配する、と流るる、と云く唐  
花即ち寶ある華、と云く、論じて云く、唐花と  
稱する、と云く、從來寶ある華、と云ひて華文  
用あつ、と云く、其の所出、外邦の華文、と云く、外  
邦之を用ひ、まゝと云く、久し、但し、寶ある華、と云く、  
文に用あつ、と云く、まゝと云く、物をまゝ、と云く、我ら邦に  
なき、歎をもぬ、後、と云く、起つ、と云く、其の取  
り合、と云く、唐花を用ひ、と云く、か、と云く、あ、と云く、  
此のめ、と云く、起つ、と云く、は、何、天皇の流、と云く、  
蔭、徳の扱、と云く、用、と云く、は、也、衛、天皇の、と云く、

えむんが考の後のセーは余かえりあつては  
蘇峰の此の書もあつたか一門の昔言を法華  
經のえさしの後、物あるを花をえさしんちけ  
るをえさしのかと思ふ此の後、後二条天皇の  
御時の信をいふ是るを思ふは花を物子  
とてんてんとは山衛天皇の記を不記つて  
記して此の花を一目すれば牡丹の如くえむん  
能くえんは牡丹とてんか異物のそもの  
不謂く花を又相尾高山寺の信の  
やも物ある牡丹とおぼしきものあつたか  
いあつた花を後、後二条天皇の記の  
せめ

此の花を物あるをえむんはせむもえむ  
牡丹の物あるの信、出来ぬ此の物子花の  
④ 一轉し出来ぬ此の物子花の  
○里川博士又文字のせめ信を記して文字を  
詩繪するは其書に佛の物子の  
泥をい出し佛の信をいふ金泥漆言  
を記し信をいふが信をいふせめ信の巧  
起りて信を文字の詩繪と出来ぬと  
○里川博士が天武天皇の朝早く改め赤漆の  
巧ありと云ふの説を耳をいへし  
赤漆と云ふ名称は天武天皇の御時

かんば本邦より漆の巧の起りしは天武天皇  
の御的よりし余が所すの所由を東大寺就  
物情を據りし事あり其の書に曰く厨子と  
口赤漆文櫛木古様作金鋼作鍔具右件厨子  
是飛鳥洋原宮御宇天皇武天傳賜存原宮  
御宇太上天皇武持天皇傳平城宮御宇中太  
上天皇正天皇七月七日傳賜平城宮御宇後  
太上天皇武聖天皇傳賜今上武今上武謙獻  
靈舎那佛とあり此の赤漆の御厨子  
しりし事あり余當りおもへし漆の御  
厨子とあるは後世の朱漆とあり然るは漆

東大寺藏

を漆もろり懸休ることと元武天皇の御的よ  
り聞けりし事ありし  
漆に朱を和すことと漆に上るは漆一の進あり  
るんは其の言ありと見えし事ありし  
しる事ありし事ありし九月の事ありし  
余官命を禱りし事ありし事ありし事ありし  
ありし事ありし事ありし事ありし事ありし  
の赤漆文櫛木御厨子とありし事ありし  
かゝりし事ありし事ありし事ありし事ありし  
人と決りし事ありし事ありし事ありし事ありし  
心倉院御持る御御用の命を禱りし事ありし







三十年よりし七十五年ノ事あり

○鎌倉の代後醍醐天皇より以下五十年と云ふ

こと大いに減し終る此の時代の特徴ハ昔の倍の勢ありたりと云へしこと多しなりと云ふこと  
里川清盛と云く後醍醐天皇より此の代ハ昔の倍の勢ありたりと云へしこと多しなりと云ふこと  
の事ハあつたつきの事と云ふ事ありと云ふこと多しなりと云ふこと  
んは先づ此の事と云ふ事ありと云ふこと多しなりと云ふこと  
こと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
後醍醐天皇の代より此の代ハ昔の倍の勢ありたりと云へしこと多しなりと云ふこと  
此の代を以てしこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと

東  
林  
院  
藏

皇以来時迄の金末を用えしことの頗る多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
る事ありしは陸奥子と云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
時勢の弱きを趨りたりと云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
事ありしは陸奥子の貢物と云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
未考の事を以てしこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
事六文治二年十月一日甲戌陸奥子乃年貢  
金四万五千兩秀衡入る送献之ニ品類類を可  
令傳はし給之故也云こと見えしこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
事一文化二年ハ平家の滅亡せしむる事ありし  
頼朝が征むる地追捕は無き地のみ補せしむる  
事ありしは陸奥子の貢物と云ふこと多しなりと云ふこと多しなりと云ふこと  
頼朝が取次

と朝廷より送致せしむる陸奥正の年貢の考案  
一年に四万五千方寸し、此の文に従て  
し然し此の考案を皆朝廷の費用する  
故美術品等の美術品を施すに料とする  
る(此の考案の考案を要するは高木陸奥  
の考案を以て京河の運送)之を揚紳家及  
法寺法徒又ハ福島の考案とする是を金高木  
とも金商人とも云ふり源義経が陸奥に向の的  
地付てし揚次末士とて是を金商人とも云ふ

陸奥正

此御書に義経の陸奥に向しむる條に云  
く承安四年の末の以五條の揚次末士と云金  
商人と云てし其の向くありけるを自ら  
とせん九郎源義経と云乗る云々と見え五  
條の揚次末士とも金商人の向の一人と見え義経  
が陸奥に向しむる承安四年の末の以五條の御  
代と見え陸奥の向くありけるを自らとせん  
揚次末士と云し其の向くありけるを自らと  
せん揚次末士の向の揚次末士は義経と  
見えしむるありけるは金商人の向の一人  
の向くありけるを揚次末士の中と見え



後秀衡及女の子泰衡の義託を辱く庇護せしむ  
頼朝公を悪む秀衡没ししに頼朝大兵をと  
るしと泰衡を討ちしぬ是を文治五年の  
ゆきし此の故陸奥にも出つる子の芳全を滅ぬ  
と見えしを皇朝人の事もあらず見えしは是余  
が陸奥の芳全のぬきぬき天をこらしぬはもと  
り滅ししは後の皇末の因り滅のする事次の一  
事然し又此の地はぬきぬき天をこらしぬは  
の金末を滅せし事因り女の子のたすはるる天  
の事ゆきし武家の威力を振ふ事とさうし武  
家を漸くこらしぬことさうし武家を漸くこらしぬ

東  
本  
家

徹々えりぬれば従前の如く公家を駭奪を  
すこと能はず従ては陸奥の皇末を用えし  
も滅のし事ぬし是女の子又前陸奥の  
事扱まふ事ぬし多く用えし武家をこらしぬ  
用えぬ事ぬし武家を事大兵をと  
る事是は皇朝の皇末の事ぬし滅のし事ぬし  
其の三つは此の三つの原因なりしは  
天皇の御年のサレ給ふ金末の事を滅し事ぬし  
この事ぬしは前陸奥を鑑定せんとの事ぬし  
はるるし因り皇朝の御事ぬし此の事ぬし  
の皇末の用事ぬし滅しし事ぬし其の事を女子の

月えちと回しちの昔も何古代の古法と比  
較せんやと云ふも其を以てし衛天子と云ふも其徳  
天皇のまの留の集末の用え方ハ昔も通を起え  
多量なる(きんぎょ)のさう畢竟の稽古の代  
と其の命し 里ツ博士ハ此の編年ハ代の特徴  
の一を著しけしと云ふも其の著書ハ其の  
又と云ふ所の施し其の施すこと其の施す  
こと其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
の著書ハ多く其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
作し其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
天皇の御代の著書ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと

皇極經世一

〇里川博士又云く其時法を歴史に從て論ずん板瓦  
天皇の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
凡九十年間ハ皆佛の御代の御代ハ其の施すこと其の施すこと  
此の御代の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
あり此の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
天皇の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
ひし打乱の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
まひしし伊勢集の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
御代の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
又云く其の御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと  
その御代ハ其の施すこと其の施すこと其の施すこと

たれば前巻の号物多く出来たり。これゆへに前  
巻の打乱若料紙若紙若厨子の若来  
道、何んぞう、古代に見ゆる光る天をう  
以事のいふところ、確たるなり。

○曰博士又美術は進取美術とぬるも美術ある  
ぬるも美術と進取美術は次を起すこと  
と流しゆく進取美術前巻と云ふも其のまゝ  
進取に出る若るうち高朝の号、聖武天皇の  
御方方の勅、怪敷陸梁の圓の若巻を作ら  
しめ、己の御、此の御方方、御身つ、  
きたまの料、と云ふ、靈舎御佛、進取

巻とん作らぬめたまひし物、んは御方方、  
んも其のまゝぬるの御、あ、う、と進取、  
術前巻のまゝを、解、又高朝に金剛  
峯寺の、不存の、仁和寺の、若巻の儀  
軌の若巻、納、若巻の佛像の文の若巻、  
ハいつんも、若巻の、若巻の巧を、  
き、その、若巻の、若巻を、  
佛、進取の、若巻、  
若巻とぬる、若巻を、

ぬるも美術前巻と云ふも其のまゝのまゝ、  
う、と進取、



花名に於て七世傳入云々

○高野山の一町石また一町卒都波安も名づく種二  
る十七基うゝ一里石といふもの五基あるといつても  
一尺高さ一丈上部の五輪配を有して五大及び金  
胎の種子を彫り下二町敷若くは里敷及び雲  
名施を名を彫り今この一町石及一里石建立の  
依起をたがぬるには弘仁元年弘法大師高野  
を参詣するに依りてのあり流民生業の巧方便を  
以て木材を之を運てえしを濫觴とす、年  
既に屢く朽腐せしを弘長元年よりありて中山  
道照光院に教之を勸めて高野に石採り  
改道せんと欲し京都御極ありて大弁立しと檀

施を公武の養り文永二年を起して辛丑十三年  
 と延建治三年よりその印を後へ弘安八年其の瀧  
 世書と修行す其檀を後嵯峨上皇を祀め在  
 り公卿貴女此条家法ゆつて武門乃至僧侶士  
 庶等歴史上著り又その多し其の比丘尼某  
 く其の多きをこん公武の妻夫人とて碑面敷る  
 不の梵文は少の僧心念載、淨土あり世尊寺経  
 報心の著りある其の檀坊とも奥の院ともあり  
 三十七基と多き別冊三十七を志し慈尊  
 院とありる八十基は胎花界あり十を標せ  
 うとありとあり、うらむ著る檀との四五を別記也

東林院

ん

一町(表) 二町(表) 太上天皇 後嵯峨天皇御也  
 即ち尊節を祀り(太上天皇安永二年四月廿一日後仙  
 洞御所御再建) 後梅町天皇 御再建 三町 太上天皇 後嵯峨天皇 御再建  
 上天皇安永二年四月廿一日後仙洞御所御再建……廿町  
 左衛門尉源家康  
 檀上り慈尊院と表町石 一町 相模守平朝臣時宗(刻  
 施位)女院太后寺賜白金若干乃為修造資以再建慈尊碑  
 安永二年五月五町 平朝臣政村 改換 二十五町 左近  
 将監平朝臣義宗文永五年閏正月日□□唐

高野山に流るる家の墓多し老翁の修路と云ふ  
墓碑と在遺跡の昔又云ふ所のを九石の如し  
老翁の衣例と云ふ

熊谷敷盛墓

一、熊谷敷盛墓 二、八達生法門三、八  
井況直忠と三、墓おまよふ熊谷直忠  
一のたは敷盛を討つ後おまよふと云ふし  
地の碑を立つ

新井上人墓

行基其墓

崇源院殿墓

徳川美志海其の也

久田満仲墓

長徳三年 赤原仲光  
建立

南龍院殿墓

湯仲の墓と傳ふ 跡不ぬの石塔やむと云ふ  
其の世に伊家の祖 頼宣立遣命して碑に満  
仲と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
皆の也

武田伝云墓

石田三成墓

宗廟トありて天正十八年三月十八日の建立と云

明智光秀墓

浅井内匠氏墓

奥沖河内利根墓

又左例と云ふ

法の上人墓

曾我兄弟墓

信田中納言墓

仁左公墓

休久阿玄若墓

朝輝墓碑

江戸燔死碑

後孫之次墓

本理院殿墓

田克大御墓

徳仁忠信墓

豊臣家墓

筒井順共又墓

北地法乃の墓碑列録之始末



たのむ結

高野へ一途登つて見たいと十数年以前から心掛て  
その間にこの橋を渡りたが、ちかくなると  
とて登るにぬい掛合はとて思つてはつてつて  
障がはたつて果たれぬ、とてなつてつて  
も此の道の川が多くの化す、とてなつてつて  
ぬ課程のちかくなると、連々橋へ入るとつてつて  
だが、この道の川を渡りてつてつてつて  
を、とてつてつてつてつて  
高野へ行くに、つてつてつてつてつて、自分の取  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

東橋

町を、つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
く、つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
寺の、北、つてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
口、つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
出、つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて





る石のあつたのだからとて高倉治の捷路  
とてつて詠老が如く世来とてつてつてつて  
く高倉四石林の如く又大切な地子とてつて  
く、即ち林木の貯蓄もこゝに在り世出一條  
もふこゝに在りしる相出の賢をみるしんあ  
攻より下を徹おろすと眼ふり式書本の  
材木が若く積りおろされ積りおろし深  
流を埋ちるもつてつてつてつてつて  
貯材物もある、又此倉山の人々のあつて一條の  
がらも相出とて高倉のつてつてつてつて  
る、設備もある、えんき高倉林の如く又

相  
出  
の  
賢

けにそのあつたのだからとて高倉治の捷路  
相出とてつてつてつてつてつてつて  
い此のつてつてつてつてつてつて  
う其のつてつてつてつてつてつて  
材料とてつてつてつてつてつて  
紙と此のつてつてつてつてつて  
ちつてつてつてつてつてつて  
此の相出とてつてつてつてつて  
くつてつてつてつてつてつて  
直つてつてつてつてつてつて  
堅硬のつてつてつてつてつて

相  
出  
の  
賢



高の景を透ると一層青々として打ちを大にきく  
嵩山を埋るるの森の深き流るる水に視るに  
千竿のぬを雲つて培きらし思つて谷の入口を  
麓を下に下りて池のほとりには木々の影が  
影の列千尺の木の古樹の雲漢と透るる天の  
妙華の影を敷く木を遮るる人もその影を  
挿しこぼれ渡る一道路の道つてをたゞさ  
形来の影のまじりたるも形をば出東ふ  
状況がさし影の密林をたゞの影の  
又路路峻険をたゞの影のまじりたるも  
影のまじりたるの影のまじりたる

得る

漸ゆく不動なるをよも前路なる峻険なるを  
の険なる前なる影のまじりたるも影のまじりたる  
とるささしと池のまじりたる影のまじりたる  
あるも影のまじりたる影のまじりたる影のまじりたる  
一と見え影のまじりたる影のまじりたる影のまじりたる  
木影を透る影のまじりたる影のまじりたる影のまじりたる  
途断するに止まるる影のまじりたる影のまじりたる  
言の影のまじりたる影のまじりたる影のまじりたる  
市の影のまじりたる影のまじりたる影のまじりたる  
亦ささしと影のまじりたる影のまじりたる影のまじりたる

漢書を抄りしものなり  
墨輿の所々女市をなすに  
り女人の入るを禁む  
ふふいさふものありし  
つて母をしのぶ親族を  
ひましく人市の前、  
強ひてする人もあり  
く書しと物に別天地  
御書と御書と御書と  
御書と御書と御書と  
御書と御書と御書と

東  
棧  
意  
録

因所をあらわすに  
取油子ととも大きき  
架する海にう海舟は  
客を先がこゝに所  
をそのののありし  
ある二十八箇寺あり  
寺後ま約九十一あり  
りつとありし寺あり  
不日かよあるを先  
とゆゑの寺ありし  
ハチ坂のありし寺

み其のそしきを待て即ち善門院へ監觀つて  
樂きたましむる時午後二十分、即  
ち高松へ入りて、五時五時三十分と三十分  
を費ししのひあり

善門院いさうしき流るるをみせば、善門院の出来  
たるを、自分とてなうしき上中の洲、善門院  
さんじか、善門院のなるをとき地盤が山に伝つる  
つらひなるもはらふ、善門院しきと枝葉とを拍の音  
しきは一板うつし、善門院家世とてつら  
ふきと獨りつらふに位である、やうなるも、善門院  
七し、善門院風名のつらふも、善門院断つた、善門院

脂をとりつけ、十三回りの可成りの傍へ、善門院脂をとりつけ  
れ、酒もおつて、善門院料理を勿論一式料理  
ひらき、善門院四や折、善門院やま、善門院點、善門院控、善門院ま、善門院日く、善門院野菜の  
元、善門院勢、善門院目、善門院回、善門院高、善門院豆、善門院る、善門院白、善門院の、善門院煮、善門院つけ、善門院回、善門院豆、善門院の、善門院胡  
麻、善門院合、善門院い、善門院回、善門院八、善門院杯、善門院豆、善門院腐、善門院白、善門院ち、善門院作、善門院房、善門院の、善門院料、善門院地、善門院ま、善門院き、  
ら、善門院き、善門院の、善門院あ、善門院も、善門院苦、善門院を、善門院つけ、善門院試、善門院ま、善門院味、善門院七、善門院志、善門院れ  
き、善門院れ、善門院可、善門院ら、善門院い、善門院熱、善門院し、善門院い、善門院七、善門院海、善門院つ、善門院い、善門院魚、善門院の、善門院料、善門院地、  
し、善門院い、善門院寧、善門院ろ、善門院此、善門院方、善門院と、善門院そ、善門院ん、善門院と、善門院先、善門院と、善門院糖、善門院し、善門院と、善門院糖、善門院  
思、善門院ひ、善門院す、善門院糖、善門院を、善門院ま、善門院一、善門院杯、善門院の、善門院お、善門院な、善門院ち、善門院を、善門院お、善門院ろ、善門院つ、善門院れ  
お、善門院ろ、善門院と、善門院お、善門院朝、善門院と、善門院お、善門院し、善門院飯、善門院取、善門院市、善門院街、善門院に、善門院散、善門院歩、善門院な  
出、善門院う、善門院け、善門院れ、善門院ち、善門院り、善門院珠、善門院数、善門院屋、善門院が、善門院志、善門院き、善門院う、善門院と、善門院珠、善門院数、善門院を、善門院



すのめ... 一二程... 外... ち... の... と...  
... 終... 一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...  
... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十...  
... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十...  
... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十...  
... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十...  
... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十...  
... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十...  
... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十...  
... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十...  
... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百...

東林堂

智信親を撰抄り出せり六十一二三才の嬰  
... 一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...  
... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十...  
... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十...  
... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十...  
... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十...  
... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十...  
... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十...  
... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十...  
... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十...  
... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百...

鳥



横事も終り朝長も終りたも珠数分の六代  
をあるのよおつていふと出うけた

河原三千尺の高山の山麓五十四町四面の  
地とあるといふ言ふ珠と一い地とある外  
四とある戸も有りといふ言ふ珠と一い地  
とある、此のすばは保あゆ言ふと河原と  
寺院の墓もあつて地親と物と一い地と  
る二十一ハ七と一い地と一い地と一い地  
西の島の出来るといふ言ふ九十九個寺と  
あつ、少海地といふ言ふ言ふ言ふ言ふ  
人共あつてあつてあつてあつてあつてあ

東林堂製

とて女人の七五山を海とて町家とてとて  
又少佐の地とていふ言ふも元とて

善つ院とて町と河を八町地と行くと一  
持とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて  
地とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて  
とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて  
境の丸丸とていふ言ふ持とて

とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて  
とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて  
とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて  
とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて  
とていふ言ふ持とていふ言ふ持とて



暮石の甚もしを若者の味捕りしきしものあり  
外なる一年の滋味をかゝるしものき例の町石  
ひきひ、いんまきとさ下あるまてんてききき(の集  
ひある。う、いんまきの柱体宿る古雅をきききとあ  
てしきききのきき代もし、院うううくたうく  
勿論院の歴史やのうのうううてきき、日中  
うも徳川家原日の言もききき候もしものを刻  
し、石のありのを認めん、大拙きききめめ  
流の言もきき候もきききあききのん前あ  
てききききききききき味、のあり  
あまのうききき珠をきき候もきききききききき  
三十四

泉  
橋  
屋  
敷

むらりのうききき(いんまきの味捕りしきしものあり  
大石のありのを認めん、大拙きききめめ  
流の言もきき候もきききあききのん前あ  
てききききききききき味、のあり  
あまのうききき珠をきき候もきききききききき  
三十四

をいふ人もその元歴史的大人物の暮るる地  
高位大親撰の聚るる子々天下何んをん  
あても俗のあつたはいついひあるか、其上  
此家の坊子の自分の志願しにうしも言及に  
海峽●清波る家であつた而例の志願を携  
り東洋の道を歩ませ其の中すまふはあつた跡が  
第...の...の...  
寺跡もあつたをいふゆが其書を記すにむら  
り延びていふ...書も...  
がこん...  
あき、沙路が車...  
京橋屋製

今...  
よ、自分も此境に入つて考ふるあふしは自  
分ら然らば後を何なる希望をもていふが昔  
の半、此境の埋まらぬといふのむあつた、こゝを  
境の奥に清波る家にあつた...  
てその...  
月...  
その道のをいふ人物は少くも...  
たる其の甲...  
あつたらば人物とおもふ...  
う、その...  
京橋屋製

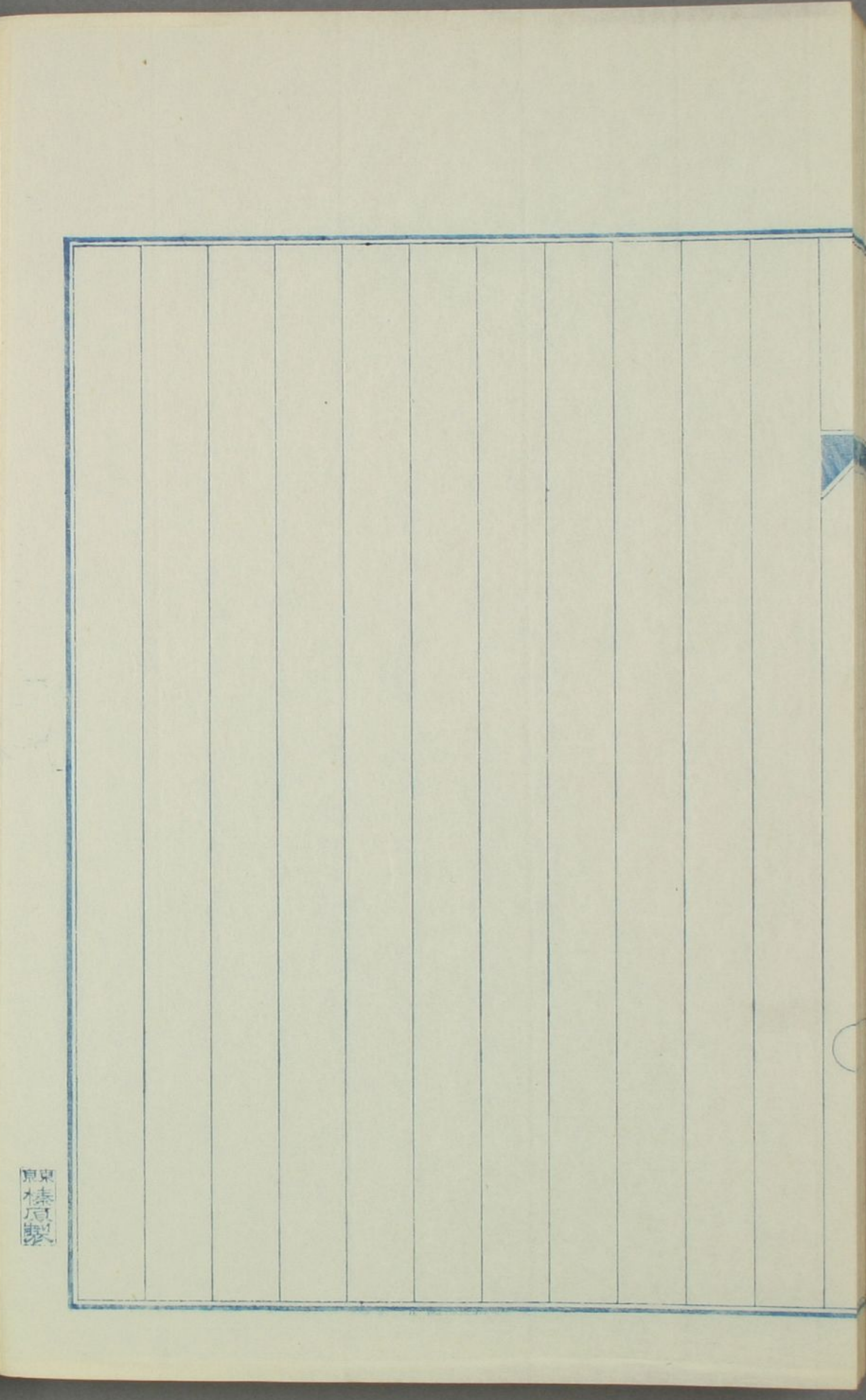
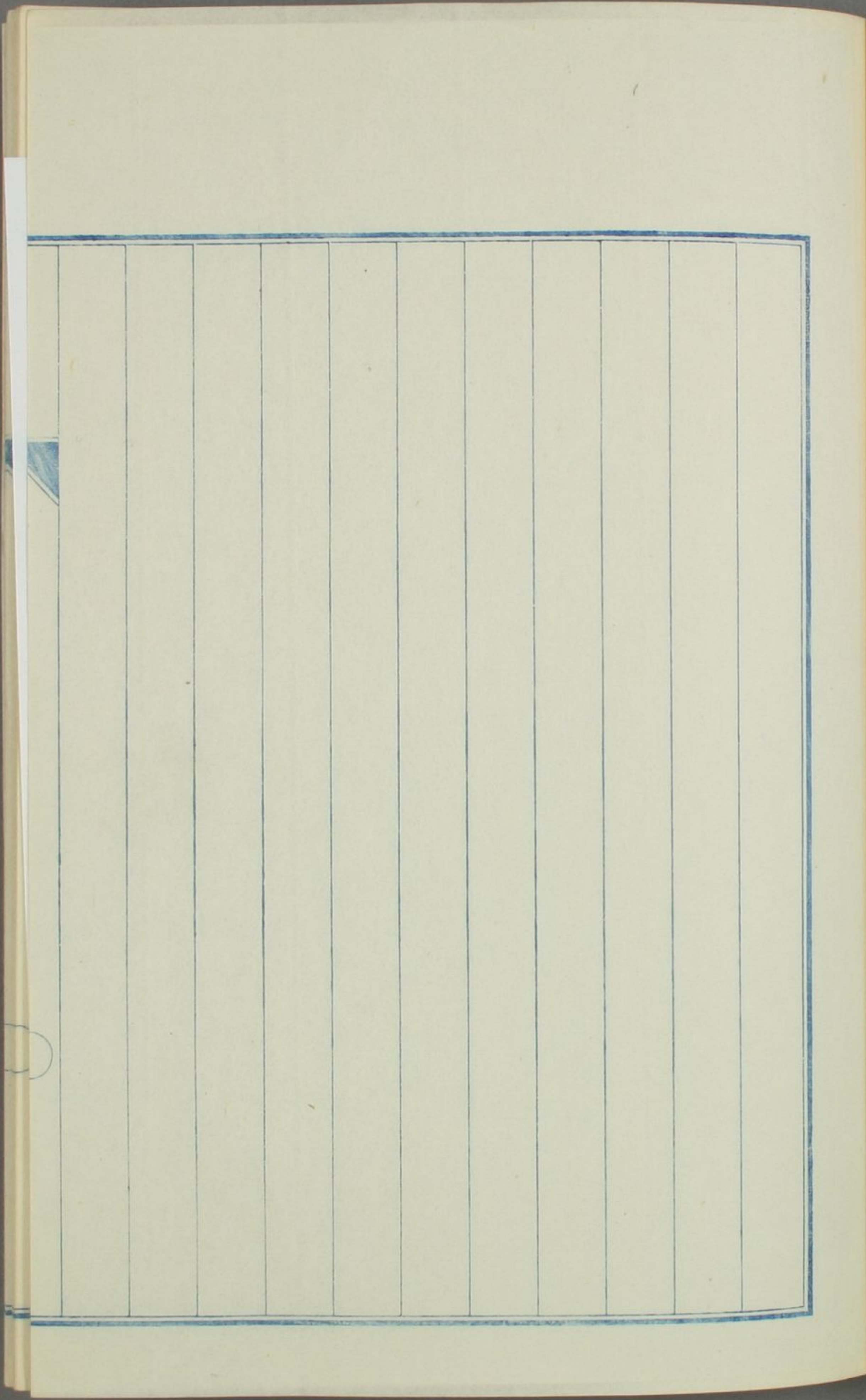
而もろい愛ふ眠りたといふと深き感したる也  
日こみよとあ人を遠てする情のあり

奥の虎をねし熊の路をぬきと更なるまじり峰寺  
瓦存世書を懸けしその縁利もよりの日ぬ次  
の火炎ふ花うこそまひをふい而もれをぬし  
そのこころの感とともいともよみあひある、随う  
て縁のゆも味を感しきうつた、  
あつらうの情の同集うねんよりのまじり  
こころ文部初井の書きう花しとあるといふ  
えとこそこころ一見のまふまふあつたはれ  
小物取のまふこころのまふまふとて別は度し

東  
林  
堂  
製

皇の御愛に花こころの法しよのむす  
河一寺の情のゆめもあつた保夫と送し  
舟の興平一人とまうて下出し  
こころの情しとのまふまふあつたはれ、  
るもまこちゆり注のまふまふあつたはれ、  
まこころの情しとのまふまふあつたはれ、

の心こころの情しとのまふまふあつたはれ、  
を終らざる二日月の光のゆりも  
花の中ゆりこころの情しとのまふまふあつたはれ、  
情家の上に行ふこともゆりもあつたはれ、  
まこころの情しとのまふまふあつたはれ、



東橋製



以下  
7丁  
白紙

○大坂を都へ帰るをき漁りもやめて来たが地出来でハ  
 一向よいものがあるからその京都方面をき美術工藝  
 学校の園芸科の先生の出来たのの二三行  
 大坂でも汽車のプラットホームに車を止めて  
 ホルト・アイ・エスを回したのが二三行宛の角一  
 寸板板がして出来てきた、端し果てたを過  
 りかたのあつとええさ、やうさ、地方滞つたを中  
 もある、此の京都か高文ののねか山文の筆  
 と偏重のしる上打紙光日と修められたが、此  
 ころころ修めるとぬええといろくの修めるとか  
 ちよと修めるところにやうさをきあつた人



めくく断りをなつて

○京都の東部の山々は其の麓に在る其の  
浦々の河川を流るるや此の地を一畝一畝  
の雨を味を感したや此に在る 懸崖の麓に  
てある一地の土。輕土の麓に在るこゝに  
を流るるを感したや此に在る 漸々の  
月形の浦を(白雲) 中を流るる浦中央の  
山をなすや此の山。月を(白雲)と名に  
たすは 漸々の浦を流るるや此に在る  
や此に在る 漸々の浦を流るるや此に在る  
一の(大)花氣を流るるや此に在る

其の目をあつていふ人々も巧みと  
作をなつて始末をさへいふ  
あつていふ人々も巧みと  
りて始末の心を感する人々を  
三葉に――いふ人々も巧みと  
るも外人もこれをいふ人々の心を  
感して 購書の心を感する人々の  
も此の二地を感する人々の心を  
一部分の 殊も其の心を感する  
と云くたもいふ人々

○山西北方の有殿を感する人々の心を

又とるが、まださうく、在りまのつとむる大坂の  
にまじり、またお屋敷の御むらじ、例のブリキの  
切り板細い昔の奴が、跪えを、お下敷を、  
くらとるをも、へんき、の、御さ、仰さ、  
し、その、れ、お、う、あ、つ、た、保、し、後、の、殿、や、を、を、お、こ  
し、身、大、い、な、れ、さ、も、お、お、し、た、板、目、だ、れ、さ、も  
汽車の事、家、さ、大、坂、硫、黄、株、式、合、名、の、硫、黄、の  
賣、い、が、し、と、あ、る、の、を、え、た、お、う、の、  
が、く、く、出、ま、る、と、さ、う、た、高、う、え、板、の、中、央、に、一、段  
千、里、の、菜、畑、を、え、た、板、の、面、積、を、お、男、女、の  
る、姓、が、硫、黄、を、  
硫、黄、の、利、き、目

硫黄

二、三、を、操、り、  
風、来、ら、い、  
後、を、え、た、  
出、ま、る、と、  
お、ち、え、し、  
操、り、  
二、心、同、体、  
と、あ、る、

圖書室

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東京  
大學  
圖書室

